

博士論文審査及び最終試験の結果

2006年05月31日

報告 西谷 修

学位申請者 中村隆之

論文名 エドゥアール・グリッサン、「反-歴史」の詩学

審査委員 西谷 修 (主査 本学)
西永良成 (本学)
真島一郎 (本学)
立花英裕 (早稲田大学)
星埜守之 (白百合女子大学)

* 審査委員会は、申請者の論文指導教員である地域文化研究科教授西谷修を主査に、副査として、学内からフランス現代文学専攻の西永良成教授、フランス語圏アフリカ地域研究の真島一郎アジア・アフリカ言語文化研究所助教授を充て、学外からフランス語圏クレオール文学の専門家で早稲田大学教授立花英裕氏、同じく白百合女子大学教授星埜守之氏を招いて、全5名で構成された。

結論

中村隆之氏から提出された博士学位請求論文「エドゥアール・グリッサン、『反-歴史』の詩学」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士(学術)の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

論文の概要

この論文は、E・グリッサンに見られる「過去の回復」という一見自明な主題を厳密に検討し直し、その輪郭を重層的に描き出して作家の意図を明らかにするとともに、その実現様態を作品の読解を通して具体的に究明し、「歴史」に関するグリッサンの思想と文学作品との関係を明らかにしたものである。そのために理論的に参照されるのは九〇年代に日本で盛んに議論された「歴史の物語り論」であり、ついで検討されるのは、主として評論集『アンティエユ論』に収められた「歴史」に関わるエッセイであり、さらには「マルチニック・サーガ」と呼ぶ作家の一連の小説の出発点となっている作品『第四世紀』である。

論文は序章と終章を含む6章で構成され、補遺として独立の小論と、2005年に行われた著者によるグリッサンのインタビューが収録されている。

序章ではまずグリッサンという作家を位置づけるコンテクストが呈示され、クレオール文学の重要なモチーフとして「歴史」がしばしば問われることが示される。というのは、

クレオール世界において「歴史」はアフリカからの奴隷輸送という切断から始まり、連続性は外部つまり西洋世界の宗主国から持ち込まれるという齟齬を抱えているからだ。

第1章では、グリッサンの基本的モチーフである「過去の回復」が厳密には何を意味するのか、「歴史の物語り論」をめぐる論議を参照しながら仔細に検討される。マルチニックの歴史的意識の形成ないし回復が文学的モチーフたりうるとしても、それは「歴史を書く」こととどう違うのか、あるいは「回復」すべきものとは何なのか。それが、90年代の論争のなかで浮き彫りになった「歴史において物語りえぬもの」、実定的な過去のなかに形をとどめえぬものとして見定められ、「歴史」と拮抗しようとするグリッサンの文学的営為の賭金であることが示される。

第2章では、作家の試論「歴史との争い」を他の試論と比較しながら検討し、そこでグリッサンの用いる「非一歴史」というタームの意味が問いただされる。それは、西洋的な「一」の原理に収斂する「歴史」(大文字の「歴史」)、あるいは個別的な複数の「歴史」に回収されず、ほつれた糸屑のように構成や統合の原理をもたないまま、闇に埋もれた人びとの経験や関係を示すものだが、グリッサンの課題は、「歴史」によって無意味な無定形なものとして排除されるその「非一歴史」を「歴史」に転化することでも、それを「物語」として語り出すことでもなく、歴史が排除する「非一歴史」のありようを「歴史との関係」において表現することであり、それが語の基本的な意味での「非一歴史の詩学」と呼ぶものであることが示される。

第3章は、グリッサンが「過去の預言的ヴィジョン」と表現するその方法的意識を検討し、それが小説『第四世紀』のなかにどのように実現されているかが分析される。この作品は、あらゆる知的な作業の外で「過去を見る」語り部パパ・ロングエと、近代的な知性をもって島の歴史を書こうとするマチューという若者との二人の関係を軸にしている。ここでは、「論理と明晰さ」が「想像的直感」に対立し、「合理的検証」が「生きられた記憶」と対立するが、この関係を通して「過去」を回復するという試みにまつわるあらゆる困難が、この二人の出会いと行き違いを通して問われている。結局作品は、ロングエを理解しようとするマチューが精神的危機に陥り、「歴史」の製作を断念することで終るが、同時にそれは「文学の誕生」を告げてもいる。

第4章では、ロングエが表象する「逃亡奴隷」の在り方とその系譜が、プランテーションの秩序との関係で問われる。逃亡奴隷とは、反乱奴隷と違ってプランテーション内での反抗者ではなく、その秩序の外の闇の空間あるいは不在の空間に逃れ出た者であり、その位置は歴史の弁証法の外にある「非一歴史」の位置と相同的になる。そしてこの作品の核心にあるエピソード、逃亡したロングエがそれを助けたプランテーションの女奴隷ルイズを誘拐し、森の中で暮らし始めるそのときに、両者の言葉の断絶が断絶のままで関係を織り始めるという描写が、けっして物語りに回収されることのない「出来事」や「関係」のみごとな「語り」になっていることが示される。

そして終章では、以上の分析と展開を踏まえて『マルモール』『奴隷監督の小屋』『マアゴニー』へと続く「マルチニック・サーガ」全体が照射され、その「歴史との争い」のモチーフの延長にあって、90年代以降のグリッサンの文学的営為がグローバル化の引き起こす世界の変容とどのように呼応して変化してゆくのが素描され、後の「全一世界」論の考察への糸口を描き出している。

補遺の1は、以上の論述の側面からの補強として、「断絶」を「関係」として捉え直すパ

ラドクサルで困難な試みが、グリッサンの「詩学」の特質であり、その「詩学」は単に文学作品を目指すものではなく、世界を再構想するという意味でひとつの知的な試みであることが強調されている。

審査の概要及び評価

本論文の評価される点は以下のとおりである。

テーマがよく絞り込まれて明確であり、序章から終章まで、首尾一貫した構成で論が展開されている。また、補遺に付された独立の小論も、グリッサンにおける「関係」概念を独自に解明するもので、本論を効果的に補足するものとなっている。

論文のテーマに関わる広範な文献渉猟と丹念な読解作業を通じて、個々の論述をめぐる書誌上および理論上の裏づけが確実に果たされている。また、先行研究も着実に踏まえ、その批判的検討のうえに立論がなされている。

「過去」「記憶」「歴史」といった一見自明で実は曖昧に使われる用語を、十分に吟味したうえで論述を展開しており、論の運びがきわめて明確である。また「歴史の物語り論」についても、複雑な論議の核心をよく把握して簡潔にまとめ、この歴史学ないし歴史哲学における論議の成果をグリッサンの課題の明確化に生かしている。

「歴史にとって異質なもの」の「異質性 (hétérogénéité)」を多面的に確認し（「非一歴史」、「歴史の外部」、「逃亡奴隷の“否定性”」等々）、それが「欠如の回復」として作品のなかに表現を見出すのではなく、文字通り「物語のなかに書き込まれた『非』」として表現されていることを、具体的な細部の解説によってよく示している。とりわけ、パパロングエとルイーズの「コミュニケーションの不可能性」の部分への着目とその分析は出色である。「表現の不可能性」とか「不可能なものの表現」といった言い回しが単なるレトリックとして弄されることが多いなかで、この論文は定義による「否定態」の、作品におけるいわば「可視化」の現場を示すことで、グリッサンの文学のある根本的な局面をみごとに呈示している。

また、この研究によって、グリッサンの中心的モチーフが、「歴史」「記憶」「物語り行為」「主体化」「共同性」等をめぐる今日の理論的考察と深く関わることが明らかにされ、同時にこの作家の営みが、「表象可能性」等をめぐる20世紀文学の深いテーマとも関わるものであることを示して、クレオール文学のもつ思想的意味をよく示唆している。

不十分な点としては、テーマや素材が絞り込まれたその分だけ、明晰であるよりもむしろ不透明に繁茂するグリッサンの作品世界を切り詰めすぎたきらいがある。そのため、テーマと不可分の文体の特徴や、関連する他の作品に分析が及んでいないことなどが指摘された。だが、それはこの論文の利点の反面でもあり、むしろこの論文の達成をもとに展開されるべき課題とみなしうる。

この論文は、日本では初めてのグリッサンのモノグラフィーとなるが、その質において今後続く研究の範となりうる達成を示しているという点で、審査委員全員の意見が一致し、上記の結論にいたった。